



特別な教育的ニーズのある児童のための内発的動機づけに基づく学習支援活動

—放課後学習会における小集団学習場面の提供を通して—



大庭重治・葉石光一（上越教育大学）

石川緑里・鈴木康・行方桃子・芦口玲子・石田脩介・井上和紀・越井絵美・樋熊一夫・山下雄己（上越教育大学大学院）

はじめに:

小学校低学年の児童の中には、読み書きや算数など、基礎的な学習において初期の段階からつまずく子どもたちがいる。これらの子どもたちは、学習に対する苦手意識が強く、教室の中での学習だけではその改善の糸口を見出せないことが多い。さらに、そのような状態が長く続くほど、学習の遅れを取り戻すことは一層困難になることが予想される。このため、このような子どもたちの学習を促すことができる特別な支援の場の設定が期待される。そのひとつとして、子ども同士の相互交渉が容易であり、かつ協同学習の機会を計画的に組織できる小集団学習場面がある。

われわれはこのような特別な教育的ニーズのある子どもたちを対象にした小集団学習場面を提供するために、平成17年度より上越市内の小学校の協力を得て、水曜日の放課後に「大学院生との放課後学習会（以下、学習会）」を開催してきた。ここでは、特別支援学級や通級指導教室を想定した小集団を形成して学習会を実施し、学習意欲の向上を促すことのできる課題内容を選定するとともに、支援者による学習支援の方法について検討を重ねてきた。本報告の目的は、従来実施してきた学習会における小集団学習支援活動の実施手続きとその経過を紹介することにより、このような場の提供と支援活動の成果を示すとともに、その継続・発展に向けた今後の検討課題を提起することにある。

学習会の実施手続き:

対象校に在籍する1年生全員の保護者に対して、毎年9月上旬に学習会に関する説明会開催の案内を配布する。説明会では、学習会の目的、支援方針、活動内容、実施計画等について説明し、その後、参加希望の申込を受け付け、合わせて学習会の目的、記録と諸検査の実施、研究成果の公表について承諾書の提出を求める。申込の際には、読み・書き、算数、コミュニケーションに関する個々のニーズについて記述を求める。

学習会は校内において水曜日の放課後に開催している。低学年の児童に対しては、午後3時より30分間はその日の宿題に関する支援を実施したり、個々に取り組める課題を提供したりする。その後、30分間は低学年の児童だけの小集団による活動を行い、午後4時から45分間は、高学年の児童も加わった小集団活動を行う。学習会は当初より特別支援教育コースを中心とした院生及び教員が開催してきた。現在は、「発達障害教育臨床実習」及び「発達障害応用教育臨床実習」の受講者とその担当教員が支援にあたっている。

小集団活動では、図1のような学習場面を創出し、主支援者（MT）と副支援者（ST）を配置した。MTは場面全体の進行に責任を持つ支援者である。集団全体に対して課題を提示し、合わせてSTと児童、及び児童相互のかかわりの状況を監視し、随時補助的な支援を実施する。STは小集団内にいて常に児童と共に活動することにより、MTには読み取ることができない児童の活動状況をMTに伝達する役割を果たす。その際、STは児童の協同活動者としてのSTcと、集団の中から子どもたちの活動を積極的に支えるSTsというふたつの機能を状況に応じて担っている。このような支援者を含む小集団において展開される他者との協同活動を通して、学習への意欲を高めるための支援を実施している。

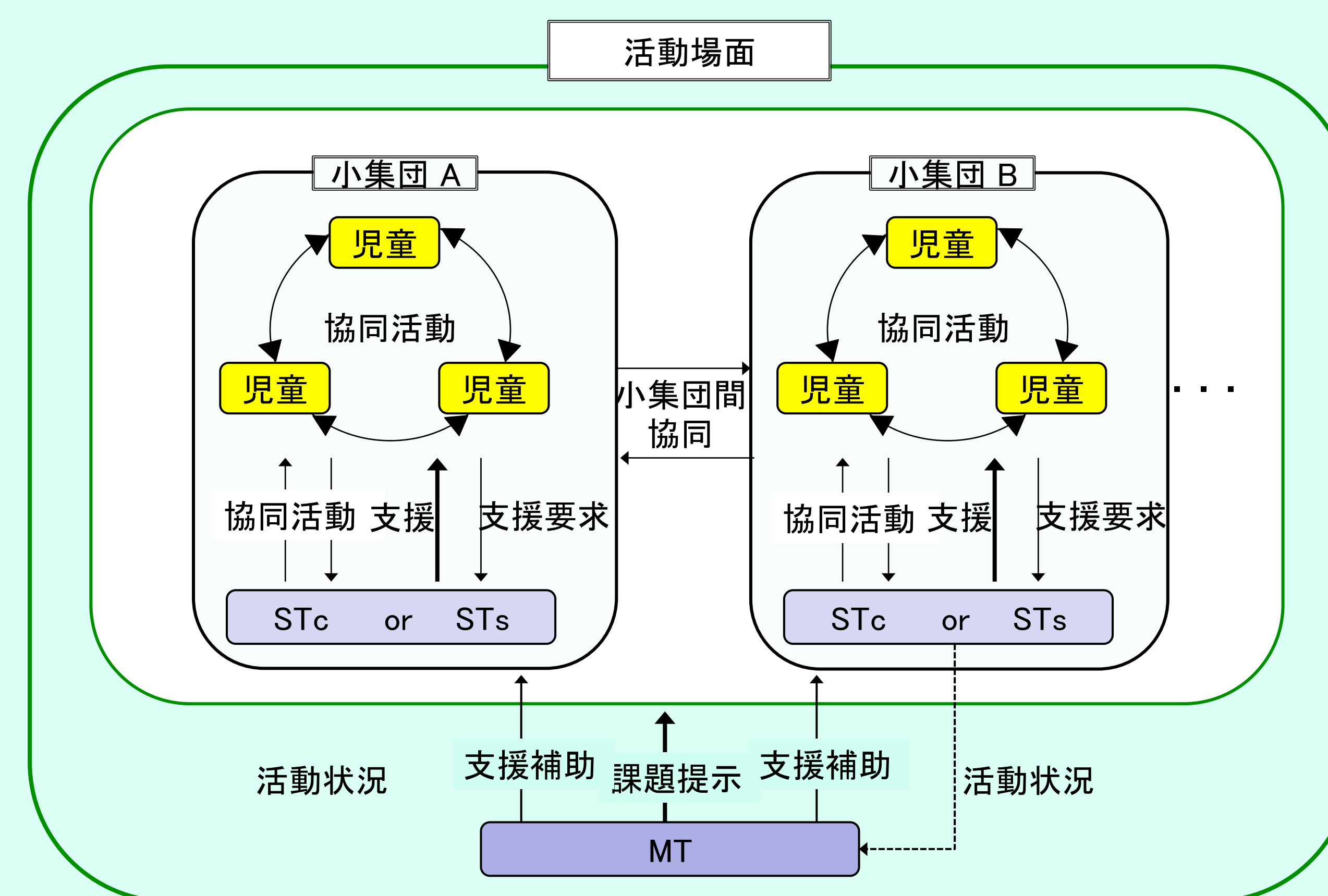


図1 小集団学習場面

STc: Sub Teacher as a Cooperator

STs: Sub Teacher as a Supporter

児童1「くだものです」

STc 「きいろっぽい色です」

児童2「はっぱがついています」

児童3「かわにとげがあります」

STs 「『パ』からはじまります」



図2 学習会において実施される課題の例

「5つのヒントを手がかりにして、事物を特定する課題」

表1 年度別学習会参加登録児童数と実施回数

実施年度	参加登録児童数 (年度末)	実施回数 (年度合計)
平成 17年度(10月～)	18名	13回
18	21	22
19	30	22
20	23	19
21	23	18
22	35	22
23	32	20
24	31	—

文献:

大庭重治・葉石光一・八島猛・山本詩織・菅野泉・長谷川桂(2012) 小集団を活用した特別な教育的ニーズのある子どもの学習支援. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 18, 29-34.

学習会の実施経過:

表1に示す通り、学習会は平成17年度に開始した。参加者は3年生までの児童が中心であり、近年では毎年30名を超える参加者がある。平成24年度現在、31名中29名が3年生以下の児童であり、学校児童数からみると約8%の児童が登録・参加している。これらの児童の中には、特別な教育的ニーズが明確に示されている児童だけではなく、学習が困難であるにもかかわらず必要とされる支援が十分に得られていない児童や定型発達児も含まれている。ただし、いずれの児童も、参加申込の際に個々の主たるニーズについては確認されている。また、学習の小集団には異なる学年の児童が含まれている。このような集団を形成することにより、常に他者が近くに存在する状況を生み出すことができ、また特別な教育的ニーズのある子どものみならず、通常の学級の中では学習に対する動機づけがなされにくい子どもたちにも支援の場を提供できる。

学習会では、読み・書き、算数、コミュニケーションに関する要素を含むオリジナルな課題が毎回準備される。その一例を図2に示す。この場面では、まず図1中の小集団A、Bがそれぞれ問題を作成し、その後、それらの問題を交換して回答する。ここで作成された問題は、集団の各構成員がひとつずつ手に入れることのできる合計5つのヒントを手がかりにして、小集団内で話し合いながらある事物を特定するという問題である。このような課題を設定することにより、課題作成過程及び課題解決過程において児童間での意見交換が行われる機会が得られ、交流感の獲得を促すことができるとともに、支援者が意図的、計画的に支援に関与することができ、児童の有能感や自己決定感が獲得されやすい状況を創出することができる。

なお、学習会において実施した課題の詳細は、平成19年度以降、6本の修士論文にもまとめられ公表された。

今後の検討課題:

まず、この学習会を継続させるためには、小学校、保護者、大学の3者の連携関係が維持されることが大前提である。そのためにも、学習会における活動内容や学習成果を常に共有できるような体制をより強化していくことが求められる。また、学習会においては、MTとSTの連携及び役割分担のあり方を整理・検討するとともに、支援過程におけるSTcとSTsの担うそれぞれの役割と児童との関わり方をより明確に区別していくことが必要である。その上で将来的には学習会の中で引き出された児童の学習意欲が日常の学習に適切に反映されていることを検証する手続きがとられる必要がある。

謝辞:

本研究の実施に際し、上越市内の小学校より多大なるご協力を頂いています。ここに記して、深く感謝申し上げます。また、これまでに学習会の支援者として関わって頂きました修了生の皆様にも感謝申し上げます。本研究の一部は、日本特殊教育学会第50回大会(2012年9月)自主シンポジウムにおいて発表した。なお本研究はJSPS科研費23531172の助成を受けたものである。